

estradiol を添加した場合にのみ酸素消費能は増大し、Progesterone, Testosterone 添加の場合には酸素消費能をさらに減少していた。

演者らはこれらの代謝様相を詳細に追求するため、酢酸-2-C¹⁴オクタン酸-1-C¹⁴、パルミチン酸-1-C¹⁴を基質とし、estradiol, progesterone, Testosterone を添加した場合の酸素消費能、炭酸生成量、アセト酢酸生成量、脂質生成量を人胎盤絨毛組織ならびに末期胎盤について観察したので報告する。

8. (演) 子宮収縮に関する研究 (第6報)

(日医大第一) 鈴木正勝, 武内正伸

紫竹芳郎, 川村満元, 本間智介

1) 子宮収縮剤の妊娠早期に於ける効果

満期分娩後には、Ergometrin 類の子宮収縮効果は極めて優れたものであるが、妊娠早期に於いては、その作用は極めて弱い。之に反し、Sparteine, Oxytocin の収縮効果は著明であるが、その作用時間が弱いので、Sparteine 又は Oxytocin に Ergometrin を加えてその子宮収縮効果を検討した。Sparteine の子宮収縮効果は、妊娠早期中絶後においては極めて強く、100mgではやゝ過度であるので、50mgとして、Ergometrin と混注してほぼ所期の効果を得た。Oxytocin は3単位でほぼ之と同じ収縮を得た。

2) 破水前後の子宮収縮については、第1報に既報したが、今回は Planimeter 値によつて得た成績を述べる。破水前後の子宮収縮は、一般に有意差はなかつたが、破水後 Tonus が3mmHg以上下降した場合には、収縮が増強した場合が多い。また破水前後の Oxytocin 効果も比較した。前期破水、早期破水例においては、分娩3～2時間までは、前にあげた正常分娩の Planimeter 曲線より明らかに低い収縮を示したが、1時間前になると、上昇して正常と同様の収縮となつた。

3) 子宮筋の顕微鏡的検索によつて得た結果を之に追加する予定である。

9. (演) 子宮収縮緩和剤の研究

(東京通信) 安井修平, 楠本雅彦, 下平和夫

島中俊次, 大沢辰治, 伊藤宜孝, 清水昭造

高橋哲也, 植松 修

近年、種々優秀な子宮収縮剤が逐次発表され、効果を認められているが、反対に子宮収縮緩和剤の研究は僅かである。

1956年 Adrenalin 誘導体の Isoxsuprine, Duvadilan の子宮収縮緩和作用が発表され、本邦に於ても岡富等の報告がある。

又、最近、米国に於ては鎮痙作用のある抗コリン体の研究により Piperidol 誘導体 Dactil に子宮収縮緩和作用のある書が発表された。

我々は以上の2物質を主とし、更に各種の薬剤を用い、マグヌス法により子宮収縮緩和作用を測定した。

非妊子宮体筋肉を Atonin により収縮運動を起し、各種薬剤を使用すると、Papaverin はもつとも強力で、Dactil, Buscopan, Duvadilan は収縮運動を明かに抑制する。麦角製剤の Hydergin は抑制作用なく、又自身の子宮収縮作用も極く僅かである。

子宮頸部に対しては、Duvadilan, Buscopan, Papaverin は収縮緩和作用があるも、Dactil のみは反対に収縮作用がある。

九嶋によれば、子宮頸部には Spincter 様機能があり、Oxytocin は子宮体部に収縮(副交感興奮)、頸を弛緩(交感興奮)と云う複雑な作用があるが、自律神経剤、子宮収縮剤では頸、体に同様に作用すると断じているが、Dactil のみはこれに属さず、体は弛緩：頸は収縮という、Oxytocin と全く反対の作用を示していることは興味深い。

この故に臨床的には Duvadilan は月経困難症に Dactil は切迫流早産に使用するのが適當である。

10. (演) 妊娠中の性比の観察

(広島植田病院) 植田秀嶺, 三原三郎

本院過去13年間のカルテ、広島市の過去7年間の報告、昭和25年より34年に亘る全国人口動態統計等の資料に基づいて、性別記載の明白なる妊娠4カ月より妊娠10カ月に至る期間の人工及び自然流早産、満期分娩に就いて妊娠中の男女の割合を調査した。妊娠の何れの時期に於いても人工及び自然流早産は共に男性は女性に比して高率にあり、亦、自然流早産の性比は人工流早産に比して、高い比率にある。妊娠4カ月及び妊娠5カ月の実測性比は人工流産、自然流産共に著しく高く、亦、妊娠10カ月の人工及び自然早産の実測性比も可成り高いが、前者は外性器の粗略なる観察に由るものであり、亦、後者は母児双方の好ましからざる諸因子の外、作為的の処理に由るものと思われ、何れも信頼性を欠く。然し妊娠6,7,8,9の4カ月の実測性比は充分に信頼性のおけるものである。従つて全妊娠期間の性比を回帰分析法に依つて推計するには前記妊娠6,7,8,9カ月の実測性比に依存するの外はない。

斯の如くにして、妊娠期間中の人工及び自然流早産の性比を回帰直線にて表わすと